

は し が き

大学は、社会によって支えられるべき知的創造機関であり、重要な社会制度というべき存在です。したがって、その大学で行われるべき教育・研究は社会のニーズとの調和の上に成り立っていないければならないことを明確に意識した活動でなければなりません。

周知のように、平成10年の旧大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」が発表されて以降、矢継ぎ早に大学改革のプランニングが進められてきました。中央教育審議会大学分科会が10年～15年先の「わが国高等教育のグランドデザイン（将来像）」を中間整理という形で発表したものがあります（平成16年10月）。「魅力ある大学づくり」と副題のついたこの報告の特長と概要については、学長も今年の年頭のあいさつの中で紹介しましたが、改めて要点を述べると、公立大学は、それぞれの設置の経緯を踏まえつつ、地域住民のニーズを無視することなく教員の研究教育における自立性と独自性を活性化し、知の拠点として魅力ある大学づくりに取り組むことを通して地域の知的創造社会づくりに貢献しようというものです。

教育研究を通して魅力ある大学“づくり”の要素に欠かせないことは、参加、競争、成果の公開の3つではないでしょうか。むろん、この3つを分離して考えることはできません。ゆえに、その「環境」づくり活動への対応を大学組織として機能させることが重要です。

わが大学の教育研究、特に研究活動の「環境」づくりは、開学以来「学長特別研究費」の費目を用意し、教授会運営組織である「研究推進委員会」を中心に進められてきました。

ささやかだけでも教員一人ひとりが、どうしても知りたいという熱望の基に研究計画を申請し、その内容において公平に競い合い、そして独自の成果を見い出すことを志し、それを発表することで知的刺激を交換し合える大学ならではの“善き場”がいつも活発に機能している世界であってほしいと願っています。この意味で研究活動3年目の成果報告書ができましたことを心からうれしく思います。

日頃より教育・研究活動に暖かなご支援をいただいた関係機関の皆様や当大学事務局並びに新潟県福祉保健部の方々にお礼を申し上げます。

平成17年6月10日

新潟県立看護大学

学長 中島 紀恵子